



第131号

(発行所)

真宗大谷派

松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30

TEL (052) 411-5301

FAX (052) 411-5341

携帯 090-1568-4623

〈E-mail〉

matsuoka@kosanji.or.jp

二度と会えない人

小学生時代の友人が亡くなったという話を聞いた。

それも5年ほど前に亡くなったとのこと。

その友人とは小学校の卒業式以来、会ったことがなかった。まさか本当に卒業式が今生の別れになるとは思いもしなかった。いつかまたどこかで会えるだろうと気軽に考えていた。

卒業式、社会に出るからは送別会などで本当にそれっきり会わなくなることも少なくない。別れの瞬間は寂しいが、やがて時間がたつてしまうと記憶が薄れ忘れていく。

だから偶然に再会した時になつかしい思いでいっぱいになる。なつかしいという感情は、忘れかけていた記憶がよみがえる時に起こる。

これはもちろん卒業式、送別会に限ったことではない。私たちはいつも今生の別れかもしれない出合いをしているのだ。



別院報恩講雑感

釋 綽智

念珠を使うことが多いので切れたものが二つになりました。そこで別院報恩講に来られた祖父江から来られた修理工の渡辺さんに言われた。

「よく切れるよ、この紐は」
私は使い方が荒いからだと思っていたので安堵するやら来てよかつたと思う。紐にもよるが紐代百円で修理できました。
初日は午後



別院報恩講 助音けいこ

の初逮夜に同推協から、三日目は二十組から助音につき、楽や須弥壇の荘厳さに聖人への報恩に感謝の念仏。四日目は荒山信氏の法話が聞きたくて出かけた。

思った通りの法話は小さい真宗聖典を持ちいつも笑顔で会場全体を眺めながら川の水のごとく続く。ですから終わってしまうと頭に何も残っていない時があるので、今回は注意して頭に残ったことをご報告いたします。

一、安楽浄土にいたる人

五濁悪世にかえりては

釈迦牟尼仏のごとくにて

利益衆生はきわもなし (浄土和讃)

と、これを何度も繰り返しおっしゃった。私たちは悪人であるが必ず救われると説かれた。これぞ本日の報恩講の意義だと示された。聖人のご命日に勤めさせていただける有難さ、これ念仏じゃ。

七百五十年前の社会を共に生きてこられた方々

の歴史をしみじみ味わっていただきたいと念を押された。

二、 経典にはよく「悲」という字が出てくる。このたて棒二本は理想と現実を表している。両者がうまく合えばいいがなかなか合わない。健康維持や子育てなど理想が大きければ大きいほどうまくいかないので悲しみは深くなる。

三、 歳をとっても頑張れ。聖人の和讃、そのほとんどは七十五歳以降に書かれたものばかりである。それが七百五十年も脈々と受け継がれているのが不思議でありがたい。頭が下がると述べられた。そうすると自ずから念仏が出ますね。

「五十六億七千万」の和讃は聖人が八十五歳頃のものです。また曾我量深氏も九十歳で大学の講義をされている。生ある今を大いに生きてほしい、と最後に戦争ほど悲しいものはない。「みなさん平和ボケしとらんか」と反省をうながされた。

悪意は反省があるが、善意は反省がない。無自覚、これが一番始末が悪いと。そして善人ぶることなかれという言葉で締められた。

アラヨ人生なんて

釋 綽智

最近、本山発行の和讃に学ぶ浄土和讃の本の中にアラヨ人生を今の若者は求めていると出ていた。「ア」は安定した生活、「ラ」はつらい思いをせず楽に、「ヨ」は経済的に余裕を持つて暮らせる。

半世紀も前になりましたが、私がまだ学生だった頃にこれは小市民的な生き方として安逸



な生活として否定的・恥辱的と受け止めていました。今になっても出てくるのに不思議ではないですね。これでは何が悪いのだと反論されましよう。

しかし著者の宮城顛氏みやぎしずかはこれには苦勞してつらい生活が前提でないとアラヨ生活を手に入れたとしても何の感動も感謝も出てこない。つまり宗教的に信念・信心が欲しい。弥陀の本願に生かされている今を思つて感謝、報恩につとめてほしいと述べられています。詳しくは本を手に読んでくだされば（別院にて八百円で買えます）

二月行事予定

二月九日(土) 七時半 同朋委員会・例会
(役員は七時)

十九日(火) 二時～四時 学習会

二十八日(木) 十時 二十八日講・女人講

三月行事予定

三月九日(土) 七時 同朋委員会・総会
(役員は六時半)

十九日(火) 二時～四時 学習会

【春季彼岸永代経・蓮如講 執行】

二十一日(祝) 十時 おつとめ

おとき 説教 前田健雄 師
一時 おつとめ

二十二日(金) 二時 おつとめ・法話

二十三日(土) 二時 おつとめ・法話

二十四日(日) 十時 女人講・報恩講

おつとめ・住職法話
おとき

二十八日(木) 十時 二十八日講・女人講